

道徳の教科化

「考え、議論する道徳」が始まりました

今年度、小学校では「特別の教科 道徳」(道徳科)が始まり、来年度は中学校でも実施されます。

学校ではこれまでも週に1時間、道徳の授業を行っていましたが、道徳教育の大切さや現代の課題について考える機会、自ら納得する答えを見つけ出そうとする力を伸ばすことが求められ、新たに「特別の教科」として位置付けられました。

変わった点は

●主に教科書を使います

他の教科と同様、教科書を使って授業が行われます。

●考え話し合うこと、自分と向き合う場面が増えます

体験的な学習や問題解決的な学習(道徳的な問題を多角的に考え、生きる上で出会うであろう、さまざまな問題や課題に対して主体的に取り組む学習)などの授業を通して、友だちと仲良くし、助け合うなどの道徳的価値について、自分自身の考えを持ち、その考えを友だち同士で話し合うことで、互いの考えを深めていきます。

分かっているつもりだったことを改めて見つめ直し、よりよい生き方ができるような「考え、議論する道徳」の時間になっていきます。

●子どもたちを認め、励ますための評価を行います

子どもが道徳科を通して、さまざまな角度や観点から、

自分のこととして一生懸命考えたこと、友だちと共に学び、新たな気づきがあったことなどを認め、励ますために評価を行います。この評価は他の子どもたちと比較するものではなく、子ども一人一人の成長を見取るもので、数値ではなく文章で行います。

学校での取り組みは

道徳教育推進担当の先生を中心に「考え、議論する道徳」のスタートに向け研修が重ねられてきました。

昨年度、三川小で行われた道徳の授業研究会には、多くの先生が参加しました。今年度も引き続き、授業参観などを行い「考え、議論する道徳」への理解を深めていくことになります。



三川小での道徳の授業

家庭や地域で

子どもたちの成長は家庭や地域の協力が不可欠です。子どもたちと道徳的な価値などについて話し合う機会を持ち、考えを認め、励ましてもらいたいと思います。

教育委員会コラム | 第5回 |



続く「日本百名山」の山旅

教育委員会委員
鈴木典男

温暖な平地に住む私は雲上の峰々、高原を渡りゆく風、蒼い空、満天の星などに引き寄せられました。高校時代から始めた登山。若いころは、日本アルプスの高峰、岩壁、沢、雪山などに挑戦していましたが、岳友の遭難から山は遠ざかりました。1964年初刊の深田久弥氏の著作「日本百名山」が登山ブームを引き起こし、その後「日本二百名山」「新日本百名山」などが名を上げ、今では中高年の登山者が増加しています。その一員として私も50歳を過

ぎてから再び登山を始め「日本百名山」全山の登頂に挑んでいます。

登山は山頂を目指すだけではなく峠、溪谷、湿原、高原、樹林などの自然の景に接触する機会が豊富です。山の歴史は古く、興味深いものがあります。別名、富士と名の付く山も多く、個性的な姿が心に残ります。

最近では各地で火山活動が活発になり登山には細心の注意が必要ですが、そのほかの遭難もかなり増加しています。登山中は天候の急変、体調不良などで急な判断を要求されるときがあります。登りは足元を確認し一步一步確実に標高を高めていきますが、展望はあまりのぞめず体力を消耗します。急峻であればあるほど。山頂は天候に恵まれれば山岳景観に圧倒されます。下山は足元を確認しないと転落の危険性があり、膝への負担が大きくなります。しかし、展望が広がります。永い人生が凝縮された時間の流れのようです。

人生には幾つもの山があります。頂で達成感を味わうだけでなく、さまざまなアプローチの中で道が拓けたり、次への道を発見できたりするときがあるようです。頂に到達できなくても何事も続けることです。富士山を百番目の山として「日本百名山」の山旅を続けていきます。